

# \* 正治二年から元久二年の飛鳥井雅経詠

\*\*\* 稲葉美樹

## はじめに

稿者は、飛鳥井雅経の家集『明日香井集』を数年前から読み進めている。上巻はほぼその作業を終え、本稿からは下巻の検討に入りたい。『明日香井集』の構成を略記すると、上巻は、定数歌を、百首歌・五十首歌・その他の定数歌の順に、さらにそれぞれの中で詠作年次順に配列している。下巻は、前半に、小規模な歌会・歌合歌を詠作年次順に並べ、後半に、四季・恋・雑から成る部類歌を収める。本稿では、正治二年（一二〇〇）から元久二年（一二〇四）までの作、すなわち、下巻冒頭の二〇一五から二〇一八までに、家集に収載されていないこの期の作を加えた一六三首について検討したい（注一）。正治二年には雅経は三二歳、建久八年（一一九七）に後鳥羽院の命により、在住していた鎌倉から帰京して、三年が経過している。この三年間の雅経の詠作で現存するのは、『鳥羽百首』（建久九年五月二〇日詠作開始）と、『五十首和歌 正治元年九月四日』（以下『五十首和歌』とする）の二つの定数歌で、いずれも私的な作品と考えられている。そして、正治二年になって、雅経は歌会・歌合に参加するようになる。そのほとんどが後鳥羽院主催のものである。元久二年で区切りとするのは、この年の三月に『新古今集』がひとまず完成したという歌壇の状況と、雅経個人も、この年の一

二月の『春日社百首』の後は、承元元年（一二〇七）に詠進した『最勝四天王院障子和歌』まで定数歌を残していないことによる。本稿では、はじめにそれぞれの和歌行事等について略述した後、表現面の特徴などについて検討したい。

## 一 本稿で取り上げる雅経歌が詠作された和歌行事等

本稿で取り上げる雅経歌は次のとおりである。

『明日香井集』一〇一五～一一四八	一三四首（注二）
「熊野類懷紙」	三首
「熊野懷紙」	八首
「建仁元年十首和歌」	一〇首
「石清水社歌合」	一首
「和歌所影供歌合」	三首
「八幡若宮撰歌合」	一首
『源家長日記』所載歌	三首 計一六三首

これらのうち、勅撰集入集歌は以下の一六首である。一〇一七（『新古今集』九五五）・一〇二〇（『新古今集』四八八）・一〇二二（『新古今集』七九八）・一〇三一（『新古今集』一四五）・一〇

五七(『新古今集』九三)・一〇七一(『続古今集』九四八)・一〇七五(『新続古今集』四四九)・一〇九三(『新古今集』一〇九四)・一一〇三(『新古今集』一三二五)・一一〇七(『新古今集』一三三三)・一一一一(『新続古今集』一二二七)・一一二二(『続後拾遺集』七九)・一二二三(『続後拾遺集』一七六)・一二三八(『新古今集』五六二)・一二四二(『新続古今集』二二)・一二四四(『新続古今集』四九七、異同あり)。ほかに、一〇四五が『新続古今集』に入集するが(一七七二)、これについては後述する。

また、『明日香井集』には重出歌が多いが、本稿で扱う中には二首存する。一一二三と三一八、一一三一と三五八であるが、いずれも本稿で扱う時期に詠まれた『百首和歌 建仁二年八月廿五日』との重複で、ともに異同がある。これについても後述する。

次に、本稿で扱う和歌が詠まれた四五度の和歌行事等について、知りえたところを述べる。ただし紙幅の都合上、『新編国歌大観』に収録されているものは詳述せず、完本の現存しない和歌行事を中心に扱う。便宜上、成立順に通し番号をふり、参考のため、この間に雅経が詠作した定数歌名を\*を付して記す。これら雅経の定数歌については拙稿をご参照いただきたい(注三)。なお、和歌行事名は、『新編国歌大観』(以下『大観』とする)に所収されているものは『大観』に従い、それ以外は『明日香井集』に記されている名を用い、表記もそれらに従う(注四)。

1 熊野類懷紙(家集になし) 田村柳菴氏は熊野類懷紙を「熊野類懷紙」は『熊野懷紙』と筆者<sup>11</sup>作者および書式・体裁が酷似した同類の懷紙であるが、熊野御幸の途次の歌会の折のものではない」と定義され(注二著書三ページ)、「正治二年夏から秋にかけて

の後鳥羽院の催した当座歌会の折のものであったと推定できるよう思う。」(同一五ページ)とされる。田村氏が、他に同一の歌題の懷紙がみつからないとされる一首を含めると、雅経の詠は三首存する。

2 石清水若宮歌合 正治二年(家集一〇一八〜一〇二二)『大観』五卷一八二 雅経歌は全真歌と番えられ、三勝二負。

3 新宮歌合 正治二年八月一日(家集一〇二三〜一〇二五)「社頭祝」「池上月」「野辺虫」の三題。他の歌人で作が知られるのは、後鳥羽院(『後鳥羽院御集』以下、『御集』とする)一四八一〜一四八三のみ。

4 玉津島会 同九月日(家集一〇二六〜一〇二八)「海浜曉月」「山館秋雨」「松風破夢」の三題。他の歌人の詠は見いだせず、詳細不明。

5 仙洞十人歌合(家集一〇二九〜一〇三八)『大観』五卷一八一 九月か一〇月に行われた。四勝三負三持。佐々木孝浩氏<sup>5</sup>論文に詳しい。

6 院当座歌合 正治二年九月(家集一〇三九〜一〇四二)『大観』五卷一七九 九月三〇日に行われた。二勝一持。佐々木氏<sup>4</sup>論文に詳しい。

7 院当座歌合 正治二年十月(家集一〇四四〜一〇四六)『大観』五卷一八〇 一〇月一日に行われた。一勝一負一持。ただし、歌合本文では、いずれも作者名が雅経ではない。一〇四四と一〇四六は隆祐、一〇四五は宗長となっている。隆祐は藤原家隆男、宗長は雅経の兄。これについては佐々木氏<sup>2</sup>論文に詳しい論考があり、歌合本文の誤りと結論づけられているのに従いたい。また、田村氏<sup>4</sup>(二三八〜二三九ページ)にも記されているように、『明日香井

集』一〇四四と一〇四六は歌合では右歌であるのに対し、一〇四五は左歌であることなどから、一〇四五は源家長歌で、歌合「枯野朝」題二番右二八番歌「わけしの千種のはてをけさ見れば心にかれぬ花のいろいろ」が雅経歌かと推測される。なお、一〇四五は、前述のように『新続古今集』に入集している（作者名は宗長）。

8 同歌合 同十月一日当座（家集一〇四二・一〇四三）「社頭霜」「東路月」の二題。『明日香井集』では7の前に置かれているが、『明月記』正治二年一〇月一日の条には「次又有御会」とあり、7に続いて行われたことが知られる。他の歌人で作が知られるのは、後鳥羽院（『御集』一五〇〇・一五〇一）のみ。

\*『正治後度百首』一〇月以降二月までの間に詠作。

9 影供歌合 同十一月八日（家集一〇四七・一〇四九）源通親主催。「暮山雪」「古寺月」「朝遠望」の三題。他の歌人で詠が知られるのは後鳥羽院（『御集』一五一〇・一五二二）と藤原隆信（『隆信集』二二八「ふるきてらの月」）である。

10 熊野懷紙（家集なし）『大観』十卷一三四 後鳥羽院が熊野御幸の途次に催した歌会の際の和歌懷紙で、雅経のものは、正治二年一二月の八首が現存する。

11 同「影供」歌合 同十二月廿六日（家集一〇五〇・一〇五二）「暁尋千鳥」「山家如春」「海辺歳暮」の三題。通親主催。他の歌人で作が知られるのは、後鳥羽院（『御集』一五一六・一五一八）・藤原家隆（『壬三集』二五九四・二五九六）・慈円（『拾玉集』四一六九・四一七一）・藤原有家（『新古今集』七〇四「海辺歳暮」）・二条院讃岐（『続古今集』六八三「海辺歳暮」）の、計一首。

12 同歌合 建仁元年正月廿八日（家集一〇五三・一〇五五）『明日香井集』では「廿八日」とするが、正しくは一八日。「遠鳥朝霞」「隣家夜梅」「山家残雪」の三題。11と同じく通親主催の影供歌合。他の歌人で作が知られるのは、後鳥羽院（『御集』一五一九・一五二二）・家隆（『壬三集』二〇三三・二〇三五）・慈円（『拾玉集』四〇八五・四〇九一）、「隣家夜梅」は二首、「山家残雪」は四首存するが、詞書に「詠三首和歌」とあり、この時のものと思われる）・隆信（『隆信集』二三）とほきしまのあしたのかすみ・三七「山家のこりのゆき」・四三「となりのむめ」もこの時の詠か）・有家（『新古今集』一四三七「山家残雪」・鴨長明（『夫木抄』四七五「遠鳥朝霞」）。ほかに、『和漢兼作集』一七「山家残雪」（作者は藤原定家）は歌題しか記されていないためこの時のものか確認できない。

13 建仁元年十首和歌（家集なし）『大観』十卷一三五 二月八日に後鳥羽院が催した。久保田淳氏は「この歌会は近習の人々の中から以後の院歌壇の中核的メンバーとなりうる力量を有する歌人を選抜する試験のごときもの」（注四著書一四六ページ）と推測されている。

\*『老若五十首歌合』二月一六・一八日の二日間にわたって行われた。

14 新宮撰歌合 建仁元年三月（家集一〇五六・一〇五八）『大観』五卷一八六 三月二九日に催された後鳥羽院主催の歌合。一勝一負一持。

15 鳥羽殿御会 同四月廿四日（家集一〇五九）「池上松風」一題。『御集』によると、鳥羽殿で行われた初度の歌会である。他の歌人で作が知られるのは、後鳥羽院（『御集』一五三五）・源具親（『続後撰集』一三五八）・藤原良経（『新後撰集』一五六八）・定家（『拾遺愚草』二四八九）。「続後撰集」・『新後撰集』の詞書とともに「建

仁二年鳥羽殿にて池上松風といふことをはじめて講ぜられけるに」であるが、建仁二年は元年の誤りか。

16 鳥羽殿影供歌合 建仁元年四月（家集一〇六〇～一〇六二）

『大観』五卷一八七 四月三〇日に行われた。一勝一負一持。

17 院御会 同日「建仁元年四月三〇日」当座（家集一〇六三・

一〇六四）16に続いて行われた。他の歌人で作が知られるのは、

後鳥羽院（『御集』一五三九・一五四〇）・良経（『秋篠月清集』一〇

六五・一〇六六）・藤原公繼（『新古今集』二五七「竹風夜涼」）。『玉

葉集』三六五の藤原俊成歌も、「山家五月雨」という歌題しか記されていないが、この時のものか。

\*『千五百番歌合』六月に詠進か。

18 同御会 同六月晦日当座（家集一〇六五）「六月祓」一題。

「六月祓」題で詠まれた歌は多く、この時のものと確認できる他の歌人の作はない。

19 和歌所 同七月廿七日同（家集一〇六六）「暮山遠雁」一題。

他の歌人で作が知られるのは、後鳥羽院（『御集』一五四四）である。『風雅集』五三六の俊成歌もこの時のものと思われる。『御集』・

『明月記』により、「松月夜涼」題で行われた歌会に続く当座歌会であったことが知られるが、雅経の「松月夜涼」題の作は見いだせない。

20 和歌所影供歌合 建仁元年八月（家集一〇六七～一〇七二）『大

観』五卷一八八 八月三日に行われた。良経歌と番えられ五負一持。

21 撰歌合 建仁元年八月十五日（家集一〇七三～一〇七八）『大

観』五卷一八九 三負三持。

22 仙洞歌合 同当座（家集一〇七九～一〇八一）『明月記』に

よると、21に続いて行われた当座歌会。『深夜聞虫』『海辺暮鹿』『羈中曉恋』の三題。他の歌人で作が知られるのは、後鳥羽院（『御集』

一五五八～一五六〇）。『如願法師集』六二六「和歌所御歌合に、羈中曉恋」もこの時のものか。ただし、他の二題は見いだせない。

23 和歌所影供歌合 建仁元年九月（二〇八二～一〇八四）『大

観』五卷一九〇 九月一三夜に行われた。二勝、勝負付欠一。

24 同歌合 同十二月二日（家集一〇八五～一〇八七）『明日香

井集』では題は「寒野冬月」「山家夕嵐」「無題」であるが、『御集』

では「寒夜冬月」「山家暮嵐」「初恋」。他に作が知られるのは、後鳥

羽院（『御集』一五六一～一五六三）・慈円（『拾玉集』四一四六～四

一五四、「寒野冬月」四首、「山家暮嵐」三首、「初恋」二首）・如願（『如願法師集』五五二「寒野冬月」、五七〇「初恋」、八三五「山家夕嵐」）。『秋篠月清集』一二七六「寒野冬月」および一四五五「初恋」、

『隆信集』二七〇「寒野冬月」もこの時のものか。

25 石清水社歌合 建仁元年十二月（家集なし）『大観』五卷一九一 一二月二八日に行われた。三題であるが、雅経歌は「旅宿嵐」一首しか残っておらず、負けている。

26 和歌所 同二年正月十三日（家集一〇八八～一〇九〇）「初

春松」「春山月」「野辺霞」の三題。他に作が知られるのは、後鳥羽

院（『御集』一五六七～一五六九）・越前（『新古今集』二四「春山月」）・如願（『閑月集』二二「野辺霞」）。『隆信集』五〇「春山月」もこの時のものか。

27 影供歌合 同二月十日（家集一〇九一～一〇九三）「海辺

霞」「閑路鷺」「忍恋」の三題。和歌所で催された。この歌合につい

ては佐々木氏①論文に詳しい。

28 同御会 八月十五夜（家集一〇九四～一〇九六）「月前虫」

「月前鹿」「月前風」の三題。『明月記』・『万代集』によると、和歌所で催された。他に作が知られるのは、後鳥羽院（『御集』一五八九

（一五九二）・通親（『万代集』二八九八「月前風」）。『範宗集』にも、二三四「月前虫」・六五二「月前風」があるが、この時のものは不明。

\*『百首和歌 建仁二年八月廿五日』 私的な作と考えられる。

29 水瀬恋十五首歌合（家集一〇九七～一一二一）『大観』五卷一九四 九月一三夜に水無瀬離宮で行われた。四勝六負五持。

30 同夜 当座（家集一一二一～一一四） 29の後に行われた。「月前秋風」「水路秋月」「暁月鹿声」の三題。他に作が知られるのは、後鳥羽院（『御集』一六二〇～一六二二）・慈円（『拾玉集』四一三〇～四一三三、「月前秋風」二首あり）。

31 同夜 折句（家集一一一六） 30に続いて詠まれた。「しうさむや」を句頭に置く。他に作が知られるのは後鳥羽院（『御集』一六一三）のみ。

32 同夜 当座（家集一一一五） 31に続いて詠まれた。『明日香井集』では、31と順序が前後している。「みなせがは」の隠題。他に作が知られるのは後鳥羽院（『御集』一六一四）のみ。

33 同御会 同「建仁」三年正月廿五日（家集一一一七） 正しくは正月一五日。「松有春色」一題。他に作が知られるのは、後鳥羽院（『御集』一六一五）・良経（『新古今集』七三五）『秋篠月清集』一四一〇）・藤原良平（『新勅撰集』四六一）・藤原頼実（『玉葉集』一〇四二）。

34 影供歌合 建仁三年六月（家集なし）『大観』五卷一九八 六月一六日に和歌所で行われた。二負一持。

35 影供のついでに 同六月十六日（家集一一一八・一一一九） 34に続いて詠まれた。家集には34は見えず、35のみ収められる。「夏月」二首。他に作が知られるのは、後鳥羽院（『御集』一六一九・一

六二〇）・良経（『秋篠月清集』一一〇二・一一〇三）。

36 八幡若宮撰歌合 建仁三年七月（家集なし） 雅経は、「海辺雁」題一首のみ選ばれ、勝っている。

37 釈阿九十賀屏風和歌 同八月十五夜（家集一一二〇～一一三一） この日撰定が行われた。他の歌人の詠は近藤美奈子氏論文に集成されている。

38 同夜 和歌所当座（家集一一三二～一一三六） 37の選定に続いて催された。『明日香井集』では詞書が「秋月五首」でわかりにくいのが、歌頭に「あきのつき」を一文字ずつ置く。他に作が知られるのは、後鳥羽院（『御集』一六二四～一六二八）・良経（『秋篠月清集』一一三六～一一四〇）・慈円（『拾玉集』三九九一～三九九五）。

39 同御会 元久元年八月十五夜当座（家集一一三七）「翫月」一題。他に作が知られるのは、後鳥羽院（『御集』一六五八）・良経（『秋篠月清集』一一五三）・定家（『拾遺愚草』一二九七）・藤原隆衡（『万代集』九九九）。「御集」・『秋篠月清集』・『拾遺愚草』によると、五首の歌会に続くものであるが、こちらの歌は『明日香井集』にない。

40 春日社歌合 元久元年（家集一一三八～一一四〇）『大観』五卷二〇二『明日香井集』では「十一月十三日」とするが、十一月一日に和歌所で催され、一日に春日社に奉納された。二勝一負。

41 北野宮歌合 元久元年十一月（家集一〇一五～一〇一七）『大観』五卷二〇一『明日香井集』では年次を「建久元年十月」と誤っている。一負二持。

42 『源家長日記』所載歌（家集なし） 一一月二三日の俊成九十賀における詠一首（七五番歌）、および翌日俊成が詠んだ感謝の意を表す二首に対して、後鳥羽院の命で詠んだ返歌二首（八二・八三）

の計三首である。

＊『千日影供百首』 元久二年正月九日詠作が開始された、私的な作品。

43 新古今竟宴 同「正しくは元久二年」三月廿六日（家集一一四二）『大観』五卷二六〇。

44 元久詩歌合（家集一一四二・一一四五）『大観』五卷二〇三・元久二年六月一日に行われた。二勝一持、勝負付欠一。

45 北野宮歌合 同七月十九日（家集一一四六・一一四八）『御集』では七月一日。「初秋暁」「暮山雨」「田家風」の三題。他に作が知られるのは、後鳥羽院（『御集』一六六九・一六七二）・家隆（『壬二集』一三二七・一三二九）・有家（『風雅集』一六九四・『暮山雨』・慈円（『雲葉集』四〇七・『初秋暁』）。

＊『百首和歌』 元久二年九月九日から詠作が開始された私的な作。

＊『春日杜百首』 一二月三日宝前で披露された。私的な作。

以上、煩雑ではあるが、本稿で扱う歌が詠まれた和歌行事等について整理を行った。これに、『正治後度百首』・『老若五十首歌合』・『千五百番歌合』を加えたものが、正治二年から元久二年の五年間に雅経が参加したことが確認される和歌行事のすべてであるということになる。『御集』および『大観』によってこの期間に行われたことが知られる和歌行事で、雅経の作が確認されないのは、一七度である。この間、建仁元年には『老若五十首歌合』に参加した後関東へ下向し、三月二〇日に帰京したことが『明月記』同日条により知られ、同年三月一六日の通親主催の影供歌合のように参加が不可能であった行事もある。「後鳥羽院の歌人としての出発時点から、とい

うよりむしろそれ以前からの側近であった」（久保田氏注四著書一四七ページ）とされる雅経が、後鳥羽院歌壇の活動が開始されたのとはほぼ同時にそれに参加し、主要メンバーとなっていた過程を、これらからたどることができるのではないだろうか。次節は、この一六三首の和歌について検討を試みたい。

## 二 和歌の検討

雅経の定数歌には、ほとんどの作品に共通する傾向と、個々の定数歌が持つ特徴とがある。前者は、流行表現や新しい表現等を多用する、本歌取が多い、の二点で、これは本稿で扱う歌でも同様である。後者の中で、本稿で扱う作にも見られるのは、初期の二作品『鳥羽百首』・『五十首和歌』の特徴である、同一の語句の多用である。ここでは、同一語句の多用について検討したい。また、本稿で扱う歌には、近い時期の他の作品と、表現・内容が類似した作が複数見られるので、それらについても検討を試みたい。

### i 同一語句の多用

本稿で扱う歌に多用されている歌語、および複数回用いられている句を表に示した。語・句の順に、使用例が多い順に示している。また、「歌数」には、『明日香井集』不載歌を含むが、建永元年以降の家集不載歌のデータが取れておらず、雅経の全歌での使用数を把握できていないため、「家集全体での使用歌数」を示した。従って、「歌数」が「家集全体での使用歌数」よりも多いことがある。なお、「波」および「空」も、それぞれ三〇例、二二例と多用されているが、家集全体での使用数も多いため、表には載せていない。

本稿で扱う歌で多用されている語句を、『鳥羽百首』・『五十首和

語句	使用されている歌の番号	歌数	家集全体での使用歌数
ながめ	1015・1026・1036・1038・1049・1072・1074・1075・1081・1087・1099・1104・1110・1118・1119・1127・1-15・10-11・10-12・10-57・34-56	21	84
ありあけ	1020・1026・1036・1043・1050・1061・1073・1081・1085・1089・1094・1095・1114・1119・1133・1139	16	54
(あけぼの)	1122・1182・13-51	3	22
(あけがた)	1041・1076・1146	3	6
(あかつき)	1101	1	18
やまのは	1058・1060・1064・1066・1089・1115・1116・1118・1139・1-15	10	45
うらかぜ	1037・1052・1071・1075・1091・1129・1141・13-51	8	25
わぶ	1015・1038・1041・1080・1081・1104・1110	7	27
ちよ	1029・1059・1088・1092・1117・1124・1129	7	35
(よろづよ)	1023・1039	2	10
(やちよ)	1129	1	1
あかし	1034・1061・1074・1106・1132・13-51	6	15
のどか	1022・1039・1088・1091・1136	5	10
きよみがた	1068・1107・1133	3	6
さをしか	1041・1095・1126	3	14
(をしか)	1114	1	3
いくへ	1017・1057・10-12・13-11	4	10
いはね	1057・1124	2	6
しのめ	1067・1123	2	3
ともちどり	1050・1129	2	2
ながめわび	1015・1038・1081・1104・1110	5	10
ながめあへず	1119・34-56	2	1
ながめやる	1049・10-12	2	4
いつかながめむ	1118・21-40	2	2
くれかかる	1027・1046・1047・1147	4	6
せきもるなみ	1068・1133	2	2
なみのかよひち	1107・1132	2	5
なみまくら	1037・1106	2	3
はこやのやま	1023・1039	2	5
みどりはふかし	1120・1142	2	2
ゆめちたえ	1081・25-26	2	2
よものあらし	1035・1086	2	7

(注)「ながめ」には、動詞「ながむ」を含む。

歌』のそれと比較するとあまり共通しておらず、ともに多用されているのは「ながめ」（および表に示さなかった「空」）のみである。多用される語句が両者で異なる理由としては、『鳥羽百首』・『五十首和歌』は私的な作品と考えられるのに対して、本稿で扱う作のほとんどが後鳥羽院が主催する和歌行事で詠まれたという作品の性質の違いが考えられよう。また、秋に行われた和歌行事が多いことにより偏りが生じたという理由も考えられる。「月」が含まれる題が多いことが、月と関わりの深い「ありあけ」「やまのは」を多用することにつながったのであろう。また、歌枕「あかし」が多く詠まれているのも、明石が月とともに詠まれることが多いためと考えられ、明石を詠んだ六首中、一一〇六と1315以外の四首に月が詠みこまれている。また、「ながめ」が多用されているのは、「ながめわび」という表現が流行するなど、この時代の傾向を反映したものである。一方、初期の二定数歌で同一の語句を多用したのは、ほかにも理由は考えられるものの、ボキャブラリーが十分ではなかったことが大きな要因であろう。従って、同一の語句を多用しているという現象は共通するものの、その原因には違いがみられると思われる。以下、いくつかの例を検討したい。

#### 羈中晩恋

一〇八一　ながめわびゆめちたえぬるうつ山

月もうらめしありあけのそら

（和歌行事番号22。以下同じ）

#### 山家恋

一一〇四　君しるや宮こもよそにみねのくも

はれぬおもひにながめわびつつ（29）

#### 寄雨恋

一一一〇　ながめわびたえぬなみだやあめとなる

しぐるるそらにまがふよの袖（29）

#### 時雨

一〇一五　ながめわびわが身よにふる夕ぐれに

くもりなはてそそらもうきこころ（41）

はじめに「ながめわび」の句が詠みこまれている例を取り上げる。五首中四首を示した。この句を雅経は一〇首に詠んでいるが、それらのうち『正治後度百首』（二二七）・『百首和歌 建仁二年八月廿五日』（三〇二）・『春日社百首』（五八七）もこの時期の作であり（残る二首中一首は『五十首和歌』（八三〇）、一五七四歌は詠歌年次不明）、同時期に集中して詠んでいることが知られる。一〇八一は、結句の「ありあけ」もこの時期に雅経が多用している語である。また、「ゆめちたえ」は、『御室五十首』の家隆歌が初出かと思われる新しい表現であるが、雅経は一〇八一のほか、『石清水社歌合』（25）二六番歌と詠作年次不明の一四八一番歌にも詠んでいる。三首とも歌枕を詠みこむ点が共通している。『石清水社歌合』歌の題は「旅宿嵐」で、一四八一も羈旅歌と思われ、慣れぬ旅寝に眠れない様を歌うが、一〇八一ではそれに恋の要素が加えられている。「ながめわび」という表現は、『水無瀬恋十五首歌合』（29）では二首に詠んでいるが、一一〇四は慈円歌と、一一一〇は後鳥羽院歌と番えられ、ともに負けている。一〇一五は、『北野宮歌合』で源通具歌と番えられ、持とされている。「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」（『古今集』一一三）を本歌とし、季節を春から冬に転じている。「くもりなはてそ」という表現の用例

は少なく、いずれも当該歌より後の作と考えられる。

# 関路秋風

一〇六八 さびしさはここにとどめつきよみがた

せきもるなみのあき風のこゑ (20)

## 秋月

一一三三 きよみがた関もるなみにつけとめて

いかにこよひのありあけの月 (38)

清見濁せきもる浪の秋の声これや都の萩の上かぜ

(20-四三 慈円)

きよみがた秋のあはれはとめてけり

関守る波にふじの山風 (20-四五 藤原忠良)

はるがすみたちへだつれどきよみがた

関もるなみのおとはかくれず (『重家集』二〇六)

「関守る波」という表現が用いられている雅経歌は、この二首のみである。『大観』で二五例検索できるが、うち二二例がここに示した歌同様、「清見濁」とともに詠まれている。「関守る波」の用例は、ここに示した藤原重家歌が初出かと思われる。重家歌では「関守る」は清見が関との関わりで添えられているにすぎないのに対し、雅経の二首は、寂しさや月の光を留めると詠んで、実際に波が関所を守っているかのようなイメージを作り出している。一〇六八は『和歌所影供歌合』では、良経の「人すまぬふはの関屋のいたびさしあれにし後はただ秋のかぜ」(『新古今集』一六〇一)と番えられ、負けている。この歌合においては、雅経歌のほかにここに示した二首に「関守る波」の句は詠まれているが、忠良歌は雅経歌と近い発

想である。「関守る波」は、ほかに、後鳥羽院・良経・定家・家隆も詠んでおり、作例数は多くないものの、新古今歌人の関心をひいた表現であったようである。雅経は、流行表現等を多く用いる傾向があるが、それが本稿で扱う歌で同一の語句を多用した理由の一つであると考えられる。

## ii 類想歌

本稿で扱う歌には、近い時期に詠まれた類似の発想の歌が存する例が複数見られるので、次にそれらを検討したい。

### 山風

一〇三五 ふきまよふよものあらしの秋のこゑ

しくるともなきやまめぐりかな (5)

三五五 ふきまよふあらしのおとのやまめぐりくもるしくれかはるるのか (『百首和歌 建仁三年八月廿五日』)

### 春恋

一〇九七 ひとしれずおさへてむすぶひまごとに

なみだうちいづる袖のはるかぜ (29)

七九 ひとしれぬころのほかにもる物は

おさへてむせぶ袖のした水 (『鳥羽百首』)

一〇三五は『仙洞十人歌合』で定家歌と番えられ、勝っている。三五五とともに、吹き乱れる風が山を廻ると詠み、不安定な空模様を描く。三五五は一〇三五の約一年後に詠まれたが、下句は意が解しにくい。一〇九七は『水無瀬恋十五首歌合』で有家歌と番えられ、持とされている。歌合本文では第二句は「おさへてむせぶ」である。「むすぶ」では解しにくいが、当該歌は「谷風にとくるこほりの

ひまごとにうちいづる浪や春のはつ花」(『古今集』一二、源当純)を本歌としており、「とくる」と「むすぶ」とを対応させている可能性も考えられるか。七九の約四年後に一〇七九は詠まれた。このほかにも、一〇一七と四三六(『千日影供百首』、一一四八と一三六一(詠作年次不明)が類似する。類似した歌を別個に二度詠んだとも考えられるが、旧作に手を加えて詠んだ可能性も考えられよう。次のような重出歌はその延長にあるのではないだろうか。

## 郭公

一一二三 一こゑもいづらはよはのほととぎす  
まつかとすればあくるしのめ

〔続後拾遺集〕一七六(37)

## 水

一一三一 かはらずよかげみし水のうすごほり  
月やひかりをむすびおきけん(37)  
三五八 いづしかもかげみし水のうすごほり  
月やひかりをむすびおきけん

一一二三・一一三一とも『釈阿九十賀屏風和歌』中の作で、『百首和歌 建仁二年八月廿五日』中の作と重出する。一一二三は三一八とはほぼ同一であるが、三一八は第二句「いづちはよはの」。「いづら」と「いづち」は、意味に変わりはない。一一三一と三五八は初句が異なっており、歌意に違いが生じる。一一三一は変わらないとしたところに祝意を込めたと考えられ、三五八に手を加えて、いわば再利用したものと思われる。『百首和歌 建仁二年八月廿五日』が私的な作で、他者にさほどその詠を知られていなかったために可能

な方法であつたかと考えられるが、雅経歌には同様の例が多く見られる(注五)。

## まとめ

以上、正治二年から元久二年までの五年間の雅経の和歌一六三首について、検討してきた。この一六三首が詠まれた和歌行事等は、四五度に及び、その大半が後鳥羽院主権のものである。雅経は、後鳥羽院歌壇が活動を開始すると間もなくそこに加えられ、同時に主要メンバーとして定着していったものと考えられる。

この一六三首の歌には、他の雅経の作と同じように、前述の「ながめわび」などの流行表現等や本歌取詠が多く存する。紙数が尽きてしまい詳しく論じることができないので、数値のみを示しておく。本歌取詠および先行歌を念頭に詠んだと思われる歌は、合わせて五〇首である。29の『水無瀬恋十五首歌合』と37の『釈阿九十賀屏風和歌』に多い。また、雅経の本歌取を論じる際にはしばしば本歌の語句を取りすぎることが問題となるが、三首がこれに該当するかと思われる。それ以外に、同時代歌人の作と初二句が同一の歌が二首(一〇六九と『正治初度百首』一七五二、作者生蓮・一〇九二と『壬二集』二〇三二、一〇九二と同じ歌合での詠)見られるが、このような作は少数で、全体的には無難に詠みこなしているように感じられる。また、流行表現等も数値を示すと、流行表現六例、新しい表現一七例、作例の少ない表現六五例、独自表現五九例を数えることができる(複数回詠まれていても、一例と数える)。

このような雅経歌の特徴は、晩年に至るまで変化ないのであろうか、引き続き『明日香井集』を読み進め、探っていきたい。

## 注

一 この時期の作は、『明日香井集』下巻後半等にも散見されるが、別の機会に検討したい。

二 本文は、熊野類懷紙は、田村柳菴氏『後鳥羽院とその周辺』（笠間書院、一九九八年）に、それ以外は『新編国歌大観』により、『明日香井集』は冷泉家時雨亭叢書本を参照した。

三 ①「飛鳥井雅経の『正治後度百首』詠」（『日本文学』〔日本文学協会〕二〇〇四年一月号）・②「飛鳥井雅経の『千五百番歌合』詠」（『十文字学園女子短期大学研究紀要』第三四集、二〇〇三年度）・③「飛鳥井雅経の『老若五十首歌合』詠」（『十文字国文』第一〇号、二〇〇四年三月）・④「飛鳥井雅経の『百首和歌 建仁二年八月廿五日』詠」（『十文字学園女子大学短期大学部研究紀要』第三五集、二〇〇四年度）・⑤「飛鳥井雅経の『千日影供百首和歌』詠」（『十文字国文』第一二号、二〇〇五年三月）・⑥「飛鳥井雅経の『春日社百首』詠」（『十文字学園女子大学短期大学部研究紀要』第三六集、二〇〇五年度）・⑦「飛鳥井雅経の『百首和歌』（元久二年九月九日）詠」（『十文字国文』第二二号、二〇〇六年三月）・⑧「飛鳥井雅経の『百首歌合』詠」（『十文字学園女子大学短期大学部研究紀要』第三七集、二〇〇六年度）・⑨「飛鳥井雅経の『建保四年院百首』詠」（『十文字国文』第一三三号、二〇〇七年三月）・⑩「飛鳥井雅経の『鳥羽百首』・詠五十首和歌 正治元年九月四日』詠」（『十文字学園女子大学短期大学部研究紀要』第三八集、二〇〇七年度）・⑪「飛鳥井雅経の『最勝四天王院障子和歌』詠」（『十文字国文』第一四四号、二〇〇八年三月）。

## 四

主な参考文献は以下のとおり。岩橋小彌太氏「熊野懷紙について」（『書道全集』第一八巻、平凡社、一九六六年）・後藤重郎氏「新古今和歌集の基礎的研究」（塙書房、一九六八年）・松野陽一氏「藤原俊成の研究」（笠間書院、一九七三年）・小島孝之氏「藤原定家の詠草覚書」（『実践国文学』第一七号、一九八〇年三月）・名子喜久雄氏「西園氏公経の正治二年の和歌について―特に『廿四番歌合』十月一日歌合の作から―」（『語学文学』第一九号、一九八一年三月）・谷山茂著作集 四 新古今時代の歌合と歌壇（角川書店、一九八三年）・佐藤恒雄氏①「新古今和歌集」（『研究資料日本古典文学』第六巻 和歌 明治書院、一九八三年）②「藤原定家研究」（『風間書房』二〇〇一年）・武藤康史氏「藤原雅経年譜」（『三田国文』第二二号、一九八四年三月）・源家長日記研究会『源家長日記 校本・研究・総索引』（『風間書房』一九八五年）・田村柳菴氏①「正治・建仁・元久期の歌壇―後鳥羽院歌壇前史―『熊野類懷紙』の総合的検討と和歌史上における意義をめぐって―」（『和歌文学論集』編集委員会編『新古今集とその時代』風間書房、一九九一年）②「熊野懷紙」『熊野類懷紙』補考（『語文』第八八輯、一九九四年三月）③「後鳥羽院熊野御幸当座歌合歌本文集成」（『古典論叢』第二六号、一九九七年一〇月）④注二著者・佐々木孝浩氏①「建仁二年二月十日影供歌合小考（一）」（『三三』）『銀杏鳥歌』第六号・第八号、一九九一年六月・一九九一年十二月・一九九二年六月②「後鳥羽院歌壇成立期における一問題―正治二年十月一日歌合の代作説をめぐって―」（『国文学研究資料館紀要』第二二号、一九九六年三月）③「中世歌合諸本の研究（一）―正治

四 特に『建保四年院百首』に多いことを拙稿⑨で述べた。

二年十月一日仙洞当座歌合について・附校本―(『斯道文庫論集』第三三輯、一九九七年)④「同(二)―正治二年九月三十日院当座歌合を中心に、摂政家月十首歌合におよぶ・附校本―(『同』第三三輯、一九九八年)⑤「同(四)―『仙洞十人歌合』について・附校本―(『同』第三五輯、二〇〇〇年)⑥「後鳥羽院歌壇『影供歌合』考」(『国語と国文学』平成一六年五月特集号)・片山享氏「桜さく遠山どりの」一首をめぐって(『甲南国文』第三九号、一九九二年三月)・久保田淳氏「藤原定家とその時代」(岩波書店、一九九四年)・上野順子氏「正治・建仁期の影供歌合について―土御門通親を中心に―」(『和歌文学研究』第六七号、一九九四年一月)・近藤美奈子氏「藤原俊成九十賀屏風歌の詠進歌纂輯稿」(『甲南国文』第四一号、一九九四年三月)・石川理子氏「新古今和歌集竟宴和歌の歌人について」(『二松学舎人文論叢』第五七輯、一九九六年一〇月)・渡部泰明氏「新古今時代―建仁元年八月十五夜撰歌合をめぐって―」(『国文学』二〇〇四年一一月号)・藤田一尊氏他『源家長日記 飛鳥井雅有卿記事 春のみやまち』(勉誠出版、二〇〇四年)・谷知子氏「後鳥羽院と元久元年十一月十日『春日社歌合』―和歌所で神社奉納歌合を催すということ―」(『明月記研究』一〇号、二〇〇五年一二月)。

\* A Study of Masatsune Asukai's waka (from the 2nd year of Shoji to the 2nd year of Genkyu)  
\*\* Miki Inaba (Japanese Language and Literature)

キーワード 飛鳥井雅経 『明日香井集』 正治 建仁 元久